



2013 年 3月号

滑稽俳句協会会長 八木 健氏 に聞く 53

紅緑編「滑稽俳句集」を読み解く 45 （聞き手 高橋素子）

高橋 > 逃げ去りし二月の尻尾手に残る 八木健

二〇一三年の年が明けて、もう二月。「一月は行く・二月は逃げる・三月は去る」等と昔からよく聞かされたものですが、それにしても私など、今やいち日、ひと月が駆け足状態です。でも、心躍るイベントを度々催され、日々皆様に囲まれてお忙しくお働きの会長には、子ども時代の様に一日が長く有意義に感じられるのでしょうね。

会長 > 一日が長い…。うーん。たしかに、就寝が十二時で起床が三時の三時間睡眠。二十年ばかりこんな生活しているから長いですね。これは五十歳になった時、人生の残りは何日かと考え、愕然としたのです。思いついたらその日に始める。始めたら止めない。ということでやるが増えてしまって、インターネットで「三六五日読むだけで俳人になれる講座」を発信し、愛媛CATVでは俳句、川柳の番組を出し、南海放送ラジオでも毎週日曜日にDJ番組をやっています。多忙というか、好きなことをやって遊んでいるというか…。

高橋 > そうですか。羨ましいお話ですね。でもご健康にはくれぐれもお気を付けになって、今後ともご活躍くださいね。

それでは、本日は紅緑編「滑稽俳句集」の「冬人事」の部の続き、季語は「埋火」からです。ご解説よろしくお願い致します。

埋火に猫背あらはれ玉ひけり 太祇

埋火に薬鐘こぼしてしまひけり 也有

埋火や先鼻をよせ耳をよせ 哲阿彌

会長 > 「埋火に猫背あらはれ・・・」、埋火を炬燵から火箸で掘り出す作業は、どうしても猫背になりますからね。「あらはれ玉ひ」は、お年寄りに敬意を表したものです。

「埋火に薬罐こぼして・・・」、体験のある方ならお分かりでしょうが、炬燵の灰は乾燥していますから、水をかけると濛々たる灰が立ち上がる。こんな筈ではなかったがというぐらいです。

「埋火や先鼻をよせ・・・」、埋火は消えてしまったのかと思うと生きていたりするもので、それを確認するために顔を近づけるのです。かすかな温もりや火の匂いを嗅ぐ。まだ生きている。掘り出して炭を注ぐのです。

高橋 > 何でも電気やガスを使う現代の生活からは、なかなか想像し難いですね。「埋火が生きている」とか、「こぼれた水に濛々と灰が立ち上がる」など、火鉢に炭をつぐ様な昔の生活を知る者にとっては、本当によく分かる懐かしいご解説です。次の季語は「炭」です。沢山ありますが、続けてご解説下さい。

炭賣や手なら顔なら夕間暮 太祇

炭うりに鏡見せたる女かな 蕪村

炭賣は小野で別れし碁打かな 巢兆

名處の炭賣黒く生れける 子規

芋の皮の焦げたるを炭屑かと思ひ誤て火に 虚子

軽石と取ちがへたる炭團かな 巢兆

露月とは炭團の如き人なるか 時化

炭團法師既に寂滅為樂かな 把栗

脇の焼けて崩るる炭團かな 紅緑

会長 > 「炭賣や手なら顔・・・」、夕暮れの炭売りは黒いので分かり難いですから、喋るから顔と分かり、動くから手と分かると、いうことですね。

「炭うりに鏡見せ・・・」、炭売りの顔が黒く汚れているので御覧なさいと、鏡を差し出したのです。大笑いしたのですね。炭売のおそらくは青年でしょう。退屈していた女にとって、格好の「からかい」の相手が見つかった。何気ない日常のヒトコマを描いて楽しい句となっています。

「炭賣は小野で別れ・・・」、「小野」が分かりませんが、碁会所かも知れません。炭売りをしている人と碁を打っていたのだと気付いた可笑しさです。

「名處の炭賣黒く・・・」、炭の販売店の中でも有名な店は何代も続く名店として知られていますから子供の頃から作業を手伝って顔も黒いということで「黒く生れた」と誇張しています。

「芋の皮の焦げたるを・・・」、灰の中から炭屑を拾い集めて再利用のために火に注ぎ足すのですが、炭かと思ったのが、実は芋皮の焦げたものだったのですね。

「軽石と取ちがへたる・・・」、炭団は燃え尽きると軽くなります。だから軽石に良く似ているのです。軽石は入浴の必需品でしたからね。

「露月とは炭團の・・・」、俳人仲間ですね。地味で無口だが、しっかり者と褒めているのです。

「炭團法師既に寂滅・・・」、炭団を法師として尊敬し、燃え尽きた時点でお釈迦様扱いですね。寂滅為樂は仏教用語。

「脇の焼けて崩るる・・・」、炭団は、形はそのままに内部が燃え尽きたりします。その内部のことを「はらわた」としたのです。はらわたの燃え尽きて形が崩れたと。

高橋 > 有難うございます。「炭」ひとつでいろいろ作句出来るものですね。次の季語は「櫓」と「懷炉」です。

櫓に寐し旅人狸にてありし みち彦

腹稿を暖めて居る懐炉かな 子規

会長 > 「楳に寐し旅人・・・」、楳は囲炉裏に焚く材です。戸外に積み上げておきますから、旅人が楳の上に寝たりします。旅人かと思ったら狸だったと。

「腹稿を暖めて居る・・・」、腹稿は下書きまでゆかない『構想』の段階ですね。懐炉は文字通り懐に入れますから暖める。構想を暖めるのに懐炉が一番近い存在ですね。

高橋 > 子規の句、面白いですね。確かに、胸の中にある構想を一番近くで暖めているのは懐炉ですね。次の季語は、「煮凍」「焼芋」「厄落とし」「柊さす」「暦賣」です。続けてご解説下さいね。

妻の留守に煮凍さがすあるじかな 几董

焼芋としるく風呂敷に煙たつ 子規

十銭の焼芋は餘り多かりき 虚子

禪に二百くるや厄おとし 太祇

鳩は外豆は内なり柊さす 碩布

ほうかぶりして懐手して暦賣 曲室

会長 > 「妻の留守に煮凍・・・」、煮凍は、「煮凝り」のことですね。あれは熱いご飯で食べると旨いからね。煮凝り専門のレストランをつくれれば、当たりますよ。しかし、家庭内で威厳ある主が、煮凝りを食べたいなんて言い出せない。妻の留守にさがす。見つけて食べ始めたところへ妻が帰宅。

高橋 > ありそうな話ですね。ふっふふ。

会長 > 「焼芋としるく・・・」、「しる」は「知る」と「白」をかけていますね。子規は俳句でも言葉遊びをしてるんですね。

「十銭の焼芋は・・・」、今の貨幣価値にすると、千円ぐらいでしょう。千円焼き芋買くと、ちょっと 余りますね。「余り」は食べ残した。「余也多過ぎる」と、これもかけています。

「褌に二百くるや・・・」、二百文ですね。盗まれないように下着に取りつけた。今でも海外旅行にはズボンに隠しポケットをつけて行く。帰国の際に麻薬を入れて、警察犬に嗅ぎつけられる。

高橋 > 脱線気味のご解説ですね。たしかに盗られては、厄おとしになりませんね。

会長 > 「褌の銭を厠に落しけり」となりかねない。「銭といふ厄を厠に落しけり」とすると、いいね。

高橋 > 「褌にくる」が可笑しいですね。

会長 > 庶民の生活の一端ですが、大店の旦那が褌にくると、もっと面白い。大祇ぐらいになると、褌にくるなんてしないと人々は思うから、大祇は庶民的なことをアピールしてるわけです。

高橋 > なるほど、誰が詠んだかで滑稽の度合いが変わるんですね。

会長 > 新幹線のグリーン車の通路を缶ビール飲みながら歩いたら可笑しいでしょ。それを衆議院議員がやったらもっと可笑しい。

高橋 > なんですか？それは実話ですか？

会長 > 遠縁になるのですが、最近亡くなった人です。つまり、誰が詠んだかで可笑しさが変わる。

「鳩は外豆は内なり・・・」、鬼豆ですね。鬼は外をハトは外。ハトには豆をやらないで家の中に撒いてということです。この「くだらない」句が可笑しいというか、これが当時の笑いなんですね。

「ほうかぶりして・・・」、暦売りは「売り声」が季節の特徴ですね。それをほうかぶりして、懐手では「ものぐさ」もいいところで、それが句になった可笑しさです。

高橋 > 面白いご解説で古の世界に遊んでいる内に、本日もお時間となってしまいました。最後にご恒例の虎造節で、残念ながら今日のインタビューを終わらせて戴きたいと思います。

会長 > はいはい！ それでは、虎造節のひと節を。

♪埋火あああ 恋のくすぶる様あに似て つつけば ほのおとおおお燃え盛るううう♪

♪ちょうど時間となりましたあああ またの口演つかまつるううう♪